

『悲しみの道』（ルカ 23：26～31・Ⅱテモテ 2：8a）

【開会聖句】

Ⅱテモテ

2:8a イエス・キリストのことを心に留めていなさい。

<序論>

・「ルカ」からの五回目です。今日から受難週に入ります。

<本論>

1. クレネ人シモン

最初の 36 節はクレネ人シモンの記事です。クレネ人とは北アフリカのキレナイカの首都キュレネ（現在のリビアの首都トリポリ？）出身の離散のユダヤ人のことで、当時、キュレネには多くのユダヤ人がいて、コミュニティーを形成していたようです。シモンは、田舎から出て来たとありましたが、それは、過越祭の巡礼のためにエルサレムにやって来たという意味か、或いは、「使徒」6 章 9 節に、当時、エルサレムにはルベルテンと呼ばれる会堂があつて、そこにはクレネ人もいたと記されていますので、その一人で、たまたまこの場面に出くわしたのかもしれませんが。ただ、聖書の登場人物には、シモンのように、その名前が記されている人と、記されていない人がいますが、それもたまたまということなんでしょうか？シモンは、平行記事の「マルコ」にも登場しますが、『彼（シモン）はアレクサンドロとルフオスの父で』（マル 15:12）と紹介されています。マルコは使徒ペテロの通訳であつたと伝わっていますので、彼は恐らく、シモンのこともペテロからの伝聞を基にして書いたのでしょう。そして、ルカも、この福音書の冒頭で、すべてのことを初めから綿密に調べて（取材して）書いたと言っていますので、シモンやその息子たちの名前は、当時の信者の間ではよく知られていたということは間違いないと思います。そして、それは、「ローマ」16 章にある、『主にあつて選ばれた人ルフオスによろしく。また彼と私の母によろしく』（ローマ 16:13）というパウロのことばからも伺えます。パウロは、ルフオスの母、つまりシモンの妻に、以前どこかでとてもお世話になったのでしょう。シモンの息子ルフオスは後にローマ教会の中心的なメンバーになったわけですが、そんなことを考えながら、改めて今朝の 26 節を読み返してみると、たった 1 節だけの記事なんですけれども、様々な物語が浮かんでくるように感じます。そして、ルカの描くシモンの姿、十字架を背負わされてイエス様の後を歩いて行ったその姿は、イエス様の有名なみことばを思い起こさせます。

『イエスは皆に言われた。「だれでもわたしについて来たいと思うなら、自分を捨て、日々自分の十字架を負って、わたしに従って来なさい』(ルカ 9:23)。

もちろん、今朝の場面では、シモンは自分が経験したことの真の意味を理解していなかったでしょう。否、むしろ、「自分はなんでこんな目に遭わなければならないんだ」と、自分の不運を呪ったかもしれません。イエス様の身代わりに十字架を負って後に従って行く道は、シモン自身にとっても悲しみの道以外の何物でもなかったと思いますが、後には思いもよらない恵みと祝福とが用意されていたのです。イエス様が言われた自分の十字架とは、自ら選び取って背負うものかもしれませんが、今朝のシモンのように、何かの偶然で、或いは、誰かから無理やり背負わされた十字架であっても、そのことを通して主の憐れみ、主の計り知れないご計画を知るということもあるのでしょう。

2. エルサレムの娘たち

そして、27 節以降の話ですが、ここには、無残な姿で引かれて行くイエス様の後を嘆き悲しみながらついて行ったという女性の一群が出てきます。ただ、彼女たちは、ガリラヤからずっとイエス様につき従ってきた女性たちではありませんでした。イエス様のことばにあるように、エルサレムの女性たちでした。そして、その涙も、イエス様を憐れむ真実な思いから流れ出た涙ではなかったんです。当時のユダヤでは、葬儀の際に、笛吹とともに、所謂「泣き女」と呼ばれる女性たちが雇われて、死者を弔うために大げさに嘆き悲しんで見せたそうです。それは当時のユダヤの風習でしたが、この場面に登場する女性たちも、そんな女性たちだったと思われます。そして、「水に落ちた犬は打て」と言われるように、彼女たちは、惨めな敗残者のように刑場に引かれて行くイエス様が既に死んだかのように葬列を作り、その後をついて行ったのです。けれども、イエス様は、そんな彼女たちの偽りの涙にさえ、悪意をもって応えるようなことはなさらず、真実なことばをもって応えられました。もしかしたら、そこにはちょっとした皮肉も込められていたのかもしれませんが。

『「エルサレムの娘たち、わたしのために泣いてはいけません。むしろ自分自身と、自分の子どもたちのために泣きなさい』(ルカ 23:28)。

それは、あのバビロン捕囚の時と同じようなエルサレムの終わりが来る、それが近づいているということですね。先週、お話しした『人の子の日』、つまり終末の出来事を予見させるようなことばですが、この預言は、直接的には、この時から数えて約 40 年後の紀元 70 年のユダヤ戦争と、その後の紀元 135 年の第二次ユダヤ戦争と呼ばれるパル・コクバの乱を預言したものと思われます。この二つの戦争でエルサレムはローマ軍によって徹底的に破壊され、文字通り瓦礫の山となってしまうのです。そして、ローマ帝国は、その瓦礫の山の上に新しいローマ様式の植民都市アエリア・カピトリナを築き上げることになります。そう考えると、この受難週の時期に、イエス様が歩いたと言われる悲しみの道（ヴィア・ドロローサ）には、世界中から大勢のキリスト

教徒がやって来て混雑するそうですが、実際にイエス様が歩かれた道というのは、はるか下に埋もれていて、その様子も今とは随分と違っていたのでしょう。ちょうど、今の大阪城が豊臣時代の大坂城の瓦礫の上に築かれたものであるように。

3. 生木と枯れ木

そして、最後の 31 節。

『生木にこのようなことが行われるなら、枯れ木には、いったい何が起こるでしょうか。』(ルカ 23:31)。

これはちょっと難解なみことばですが、恐らく、当時のことわざであったのではないかと推測されています。その意とするところは、生木であるイエス様、そして、それに従う者たちでさえ、このようなさばきに遭うのなら、枯れ木であるエルサレム、或いは、イエス様を断罪した者たちは、どれほどのさばきに遭うだろうか、ということでしょう。生木は燃えにくいので、それを薪にするというのは理屈に合わないことです。燃えやすい枯れ木を薪にしてこそ、理に適っていると言えます。イエス様は、神のみこころに従って生きてきたこの自分でさえ、このような理不尽な目に遭うのだから、ましてあなたがたも同じような目に遭わないだろうか、と預言されたというか、覚悟するようと言われたのでしょう。かつて弟子たちに向かって、『世にあつては苦難があります。しかし、勇気を出しなさい。わたしはすでに世に勝ちました』(ヨハ 16:33)と言われたように。

<結論>

今朝の開会聖句は、パウロが殉教の死を前にして、若い弟子のテモテに書き送ったことばです。

『イエス・キリストのことを心に留めていなさい』(Ⅱテモ 2:8a)。

私たちはよく、自分は正当な扱いを、報いを受けていないとか、なんで自分だけが、と不満に思ったり、思い煩ったりしますが、神のひとり子であるイエス様でさえ、そんな目に遭われたのだから、ある意味、私たちにもそういうことがあるというのは当然のことなんです。最後に、この後でパウロが引用した初代教会の讃美歌と思われるみことばをお読みして、今朝のメッセージを閉じたいと思います。

『次のことばは真実です。「私たちが、キリストとともに死んだのなら、キリストとともに生きるようになる。耐え忍んでいるなら、キリストとともに王となる。キリストを否むなら、キリストもまた、私たちを否まれる。私たちが真実でなくても、キリストは常に真実である。ご自分を否むことができないからである。」』(同 2:11~13)。